

---

## 日本児童英語教育学会(JASTEC) 第9回全国大会参会記

伊藤克敏

6月19日(日)大阪の摂南大学で上記の学会が開催され、「児童英語教育の意義を問い直す」と題するシンポジウムにパネリストとして招待されたので参加した。本学会は『0歳からの英語教育』という著書で知られている五島忠久氏(大阪大学名誉教授)を中心に結成されたもので、東京、名古屋、大阪に事務局を持ち、全国各地に約300名の会員を擁している。関東地区、中部地区、関西地区で各々、地区大会を開く一方、東京と大阪で交互に年一回、全国大会を開催している。

関東と関西で各々、プロジェクトチームを組み、関西では中学入学以前に英語教育を受けた者と受けなかった者との、英語の4技能面の能力差を追跡調査している。その結果、中学では余り差はないが、高校に入ってから前者の優位差が大きくなっていることが明らかにされている。今年度の大会でwritingの追跡調査報告が行われた。一方、関東地区では今年度より中学一年生を対象に、児童英語教育経験者(Ex)と非経験者(Non-Ex)の英語学習に対する態度のアンケート調査を行っている。本年度の大会ではその中間報告が行われたのであるが、全般的にいえることは、Non-Exに比べてExの方が中学での英語学習に対する態度は積極的で、児童英語教育の効果がかなりはっきり表われている。又、外国人に対する態度や、

将来英語を使う職業につきたいかどうかの質問に対しても、Exの方が前向きで意欲的な態度が看取できた。

午前中前半のプロジェクトチーム研究報告に続いて、2つの研究発表が行われた。一つは中山兼芳氏(常葉学園大)による「国際人の養成を旨とした早期英語教育」で、早期英語教育では単に中学の英語を先取的に教えるだけではなく、「違いを認め」異質なものを受け入れ好意的に理解しようとする、国際人としての基本的態度の養成が肝要である、との見解を述べた。二つ目は、中島和子氏(同志社女子大)による「幼、小、中、高、大の英語教育—学ぶ喜び、教える喜び」という発表で、児童期に英語を習わなかった大学生は全般的に発音が劣悪であることを指摘し、現在の中、高における「文法中心」の英語学習からコミュニケーション中心のそれへの切換えの必要性を訴えた。

午後は「児童英語教育の意義を問いなおす」というタイトルでシンポジウムが行われた。先ず、末延岑生氏(神戸商科大)は英語教育全体における児童英語教育の位置づけの観点から発言し、IQ140以下の子どもは外国語習得に向いていない、といった波多野完治氏(発達心理学)の論を反駁して、人間は生得的に言語習得能力を備えて

---

いるのであり、全ての子どもが英語を習得する能力があり、それを児童期に活性化する英語教育が望まれる、とした。筆者は人間教育の面から発言し、心の柔かいうちにことばを通して異文化を体験させ、その結果、異質な文化に対する寛容な態度を養成するには児童英語教育こそ大切であることを強調した。更にカナダ、米国、オーストラリアにおける児童二言語教育の実態調査から、単一語児より二言語児の方が抽象的思考に優れており、母語に対するより深い認識を持っていることを指摘した。野上三枝子（日本橋女学館短大）は、技能習得の面から児童期こそ自然な言語習得能力

によって英語を創造的に習得することができる、とした。最後に中山行弘氏（摂南大）は国際理解教育の観点から、児童英語教育を再検討した。英米への過度の言語文化的同化を避け、多国籍言語としての英語へのアプローチを目ざすべきであるとした。

長年、公立小学校からの英語教育の必要性を訴え、自ら静岡県公立小学校で課外英語授業を担当している大棟猛氏がフロアーから「日本の英語教育は小学校から始められるべきで、抜本的改革が必要である」と発言し、それをめぐって白熱した議論が交わされた。